法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

町工場の世界 ： 小関智弘の町工場巡礼記の研究(2)

萩原, 進 / HAGIWARA, Susumu

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
70
(号 / Number)
1・2
(開始ページ / Start Page)
29
(終了ページ / End Page)
50
(発行年 / Year)
2002-07-05
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003024

町工場の世界：小関智弘の町工場巡礼記の研究(2)

萩　原　　進

目　次

はじめに
第一章　労働倫理学の必要性
　第一節　労働経済学における労働観の一面性
　第二節　仕事と家族：浅田次郎作『鉄道員（ぽっぽや）』のメッセージ
（第69巻　第4号）
　第三節　ルター神学における〈職業〉と〈救済〉
　　第一項　人はパンのみに生くるにあらず
　　第二項　ルターのベルーフ論
　　第三項　ルター神学と労働研究
（以上　本号）
第二章　小関智弘の町工場巡礼記の研究――その（1）
　第一節　町工場に働く人々
　第二節　機械工のキャリア
第三章　小関智弘の町工場巡礼記の研究――その（2）
　第一節　旋盤工の仕事
　第二節　ME革命と旋盤工
　第三節　小関智弘の熟練論
　むすび

第三節　ルター神学における〈職業〉と〈救済〉

第一項　人はパンのみに生くるにあらず

職業あるいは仕事とは，生活の資を稼ぎだすために人がやむを得ず行なわざるを得ないところの労苦にすぎない，といったようなあまりにも経済

学的に偏った労働観をもってしては決して捉えることができない，えもいえぬ奥深いものが職業あるいは仕事の世界には含まれています。そのことは，学校卒業後に直ぐにでも就かねばならない職業を求めて，在学中の学生たちが懸命に行っている求職活動の実際を，ちょっと注意して観察してみれば一目瞭然であるように思われます。学生たちは概ね，卒業後の就職先を探すにあたって，(1)雇用の安定性，(2)労働条件の良し悪し，(3)社会の評判，などの諸条件を基準にして，とりあえず入りたい企業や官庁の序列と優先順位を決め，その上でなるたけ序列の高い企業に就職することを希望している，と言って大過ないでしょう。しかし学生たちは，これらの三つの条件を満たしている勤め先または仕事にありつけることさえできれば，それで充分だと考えているわけでは決してありません。

これら三つの条件をすべて満たしている“良い仕事”〔good job〕にめぐり会える機会は，それほど多くはございませんので，普通の学生がそうした“良い仕事”にありつけるチャンスはごく僅かであって，まさしく優良企業の入り口は“狭き門”以外の何物でもありません。ですから，苦労に苦労を重ねてこの“狭き門”を通り抜けて，なんとか“良い仕事”にありつけた学生が，得意満面として，天下を取ったような気分になったとしても決しておかしいわけではないのです。しかし，“良い仕事”に就けるチャンスを掴んだ幸運な学生の場合であっても，有頂天になってはしゃいでいる場合はまれであって，これから就こうとしている仕事が，(1)自分に適した仕事なのかどうか，(2)社会において価値のあるやりがいのある仕事なのかどうか，(3)〈別の仕事を選ぶべきであった〉と晩年になって後悔するようなことはないであろうか，などとグジグジと悩み続けるのが普通です。内定した就職先が，生涯の仕事をする場所として本当にふさわしい場所なのかどうか，あれこれと迷い懊悩する学生が実に多いのです。

こうした事例からも明らかなように，生涯にわたって続けるべき仕事

(すなわち職業) の選択に際して学生たちは，学生時代のアルバイト探しとは打って変わって，単に生活の資を稼ぎだすためにやむを得ず提供する労苦以上の思いと期待を込めて，求職活動を行なっているように見受けられます。職業選択に対する学生たちの態度は，真剣そのものと言ってよいでしょう。彼らは，生涯にわたって続けるべき仕事に対しては，たった一回しか与えられていない人間の生に〈意味〉を付与してくれるような，そうした崇高ささえ帯びた使命感をもって向き合い，使命を果たし終えた静寂の中でこの世との離別を迎えたい，と考えているのかもしれません。〈やりがいのある〉仕事とか，〈晩年になって後悔しない〉仕事と言ったような，学生たちが何げなく使っている言葉の端々から，彼らが本当に求めているものは，“お金”や“地位”と言うよりもむしろ，“使命”感の持てる仕事あるいは“夢”をもって生きていける職業に就くことなのではないか，と思われるのです。学生たちは，〈人はパンのみに生くるにあらず〉と，心の中でつぶやいているのではないでしょうか。

筆者は，2000年度に担当した経済学部の一年生のクラス授業で，映画『鉄道員（ぽっぽや)』を学生たちに見せた上で，感想文を書いてもらったことがありました。機関士佐藤乙松の仕事一筋の生き方に対する学生たちの反応は，実にさまざまでありましたが，“使命感”を持ち続けて仕事に生きた乙松の生涯には，すべての学生が感動を覚えたようでした。乙松はもっと家庭を大切にすべきであった，と批判する学生が多かったのも事実ですが，仕事に対して“使命感”を失うことなく生涯を終えていった乙松の生き方を，くさしたり冷笑するような学生はおりませんでした。なかには，〈自分も乙松のような男らしい人生を送りたい〉と，感傷的な感想文を寄せてきた学生もおりました。

ところで職業選択の問題はこれまで，主たる家計支持者である成年男子に特有の問題であると考えられてきましたが，女性の労働力率が高くな

り，女性の社会参加が活発になるにつれて，状況は大きく変わってまいりました。女子学生たちは，学校卒業後に就職すると直ぐに結婚適齢期を迎え，〈家庭と職業〉のどちらを選ぶべきかといったまことにやっかいな大問題に直面せざるをえなくなります。ですから女子学生にとって職業選択の問題は，男子学生よりもはるかに複雑で深刻な問題であると言えるのです。一般に女子学生たちは，結婚して子供を生み育てることは，女性の務めであり喜びであると考えています。しかし最近の女子学生の間には，主婦として人生を送るだけでなく，できたら仕事もやり続けて男子と同様の〈職業的生涯〉を送ってみたい，といった〈家庭と職業〉の両立を望む傾向が徐々に強まってきています。結婚と家庭生活における成功は，女性の幸福にとって決定的に重要な条件であると言えるのですが，そうした結婚願望の強烈な女性たちですらも，ホーム・キーパーとして家事と育児を担いながら同時に職業の方も継続していきたい，と考え始めて来ているのです。こうした女性の職業指向の高まりと共に，三十歳台前半まで仕事に明け暮れてしまったために，結婚相手に出会う機会に恵まれずに，いつの間にか独身のまま歳をとってしまった女性に対して，〈オールド・ミス〉といったような蔑んだものの言い方をする風潮はかなり弱まったようですし，女性もそれほど婚期を逸してしまったことにあせりを感じなくなってきているように見受けられます。

かつては〈家庭と職業〉の選択に際して，敢然と職業を捨ててしまって家庭を選んだ歌手の山口百恵さんに代表される“百恵派”が，女性たちの間でも主流派でありました。しかし最近は，〈家庭と職業〉の両立を指向した歌手の松田聖子さんのような“聖子派”が，急速に増えてきているように見受けられます。これまで男性の職業と見なされてきた，放送やジャーナリズムなどの多忙で不規則な仕事の分野などにも，女性たちがどんどん進出し始めており，昨今は“女子アナ”〔女性アナウンサーの略語〕などと呼ばれて女性の花形職種（キャリア）のように見なされております

が，こうした最近の現象は労働市場における特異な現象ではなく，日常茶飯の出来事と言ってよいでしょう。筆者の勤め先である法政大学経済学部の場合もそうで，筆者が教鞭を執り始めた1970年頃には女性の教授は御一人もおられませんでしたが，今ではウヨウヨと形容したくなるほど女性教授が増えましたので，女性の学部長や総長が誕生しても誰も珍事とは思わない時代が間もなくやって来るのではないかと思われます。“女子プロレスラー”，“女狂言役者”，“女性のタクシー運転手”など，具体例をいくらでも挙げられるほど，男性労働市場への女性たちの進出はめざましく進んでおります。労働市場における“聖子派”女性増大の背景には，(1)夫婦共働きを続けざるを得ないような家計状況の深刻化に加えて，(2)夫の失業あるいは夫との離婚などの女性に経済的自立を強いるような社会的緊張の増大，などの経済的な事情があると言えましょう。女性たちが，家計の補助あるいは将来起こるかもしれない事故に対して保険を掛ける意味合いで，結婚後も仕事を継続する傾向を強めてきているのは確かなことでしょう。しかし女性の労働力率の上昇原因を，このような経済的な事情の変化のみに求めるのは，いかがなものでしょうか。この種の議論は，いささか経済学的に偏り過ぎた議論だとは言えないでしょうか。

女性の側に，一方において，女性もキャリアを持って当然と考えるキャリア指向が強くなってきていながら，同時に他方において，子育てや老親の世話を喜びと感じないどころか逆に億劫に感じる傾向が強まって来ているように思われます。子育てや老親の世話よりも仕事のほうが面白いと思う女性が増えてきてはいないでしょうか。もしも若い女性たちの間で，〈仕事と家庭〉に対する価値付けの面において，微妙な意識変化が起こっているのであるとすれば，たとえそれが小さな小さな変化であったとしても，その変化の重要性を無視することは許されないでしょう。仕事に対する女性自身の評価の静かでゆっくりとした変化は，人々の耳目を惹動させるような目立った変化ではありません。しかしそのようなたぐいの微妙な

社会変動，すなわち，“静かな目立たない社会革命”〔＝subtle revolution〕とか“見えない社会革命”〔＝unseen revolution〕と呼ばれる現象にこそ，社会科学者は眼をこすって注目する必要があるのではないか，と私には思われるのです。

筆者は高校三年生の夏休みに，大学受験の勉強のために，イギリスの小説家のサモーセット・モームが書いた名作『月と六ペンス』を原文で読み，モームから，小説の本当の面白さを教えてもらったような気が致しました。それ以来モームの小説に病み付きになってしまって，『人間の絆』他多数の作品を読んでまいりました。不思議なことに，モームの小説に描かれた女性は，揶揄と嘲笑の対象としてしか登場いたしませんし，スイフトほどではありませんが，モームは女性を，なにかチンパンジーの親類のように扱ってさえいるのです。真面目なフェミニストであったはずの筆者が，何故にこんな，イギリスを代表する悪名高い女性嘲弄文学にのめり込んでしまったのか，未だに解けない謎なのですが，ともかくモームから受けた影響は小さくありませんでした。モームの女性観を一言で要約すると，〈女は六ペンスの世界のみを生きる〉ということに尽きるのではないでしょうか。モームに限らず，昔から女性を“女子供”と称して子供同様に扱ってきましたが，かように男たちによってバカ者呼ばわりされ続けてきた女性たちも，遂に1960年頃から，社会参加を求めて行動を開始するに至ったのです。そして今日においては，モームの女性嘲弄文学の如きものの影響は，影をひそめてしまいました。

1980年代に大学生たちは，やれ“百恵派”が良いかそれとも“聖子派”が良いかと，女性の理想像を巡って果てしなく議論を続けたものでした。居酒屋で交された学生たちのこの種の議論を，労働経済学の専攻者である私は，大変参考になる含蓄の深い議論として聞かせてもらった記憶がありますが，同時にこの種の議論は，若い女子学生を交えてワインを飲みなが

ら行なわれた議論であったわけですから，甘く楽しい思い出として記憶に刻み込まれているのも事実であります。“百恵派”対“聖子派”という流行語は，1980年代に女性週刊誌が流行らせたジャーゴン（隠語）に過ぎませんが，現時点から振り返って考えてみますと，この“百恵派”対“聖子派”という言葉は，意外と奥の深い言葉であり，ひょっとすると学術用語としても充分使用に耐えうる，含蓄のある言葉だったのではないかとも考えられます。何故かというと，共にプロフェショナルの芸能人であった山口百恵さんと松田聖子さんが，〈仕事と家庭〉に関して対照的な人生の軌跡を歩んでこられたわけですから，この二人の女性は，女性のキャリア・パターンを重要な研究テーマにしている労働経済学に対して，限りなく深い示唆を与えてくれたことになるわけです。トップ・スターの座を惜しげもなく投げ捨て，芸能界から完全にリタイヤーして家庭生活に専念してきた山口百恵さんの生き方は，家族の絆というものを何よりも重要視する人々にとっては，本当に聖母のように優しく美しい生き方のように写ったことでしょう。他方，家庭の問題で離婚などの様々な苦労を経験しながらも，プロフェショナルの歌手として芸能界の第一線で常に明るく活躍し続けて来た松田聖子さんのいじらしい姿を見て，女性にとっての〈仕事と家庭〉の両立の難しさを知る人々は，思わず〈聖子さんガンバレ〉と応援の拍手を送りたい思いにかられたのではないでしょうか。人生に対して〈家庭〉と〈仕事〉のそれぞれが持つ意味を考えていく上で，これほど参考になる面白い実例は，そう多くはないように思われるのです。

さて，人間にとってあるいは人間の生涯にとって，〈仕事〉（＝職業）はいかなる〈意味〉をもっているのでしょうか。〈仕事の意味〉〔Sinn von Beruf〕と言う時の〈意味〉とは，そもそも何を表現しているのでしょうか。人生に対して持っている仕事の意味を見究めるには，何よりもまず，人生そのものにいかなる意味があるのかが問われねばなりません。しかしこの問は，非常な難問であって，簡単に答えられる問ではございません。

周知のように西欧哲学における現象学的存在論の究極のテーマは，人間存在（ハイデッガーの所謂 Dasein ダーザイン）の意味の探求にありますので，この問題を究明していくためには当然，フッサール以降の現象学の世界に入っていかねばならないでしょう。しかし本節の課題は，ルター神学における〈仕事の意味づけ〉の検討に限定されていますので，現象学的存在論の世界にまで敢えて入っていく必要はなかろうかと思うのです。従ってルター神学を扱う本節においては，〈人間存在の意味〉について，パウロ以来のキリスト教神学によって与えられている人間存在の意味論を前提にすることにしたいと思います。すなわち，この世における人間存在の意味は，あの世における人間の霊的復活の準備としてのみ意味を持つ，というキリスト教神学の常識を前提にして，議論を進めていくことに致しましょう。その上で，ルターの〈仕事の意味づけ〉に関する議論を検討していくのが，妥当であるように思われます。キリスト教の神学者であったルターは，当然パウロのキリスト論と義認論を継承していますので，〈人間存在の意味〉についてさしあたり以上のように考えておいても特に問題はないように思われます。

第二項　ルターのベルーフ論

ルターに始まる宗教改革が，西ヨーロッパ社会の“近代化”と“資本主義の形成”に対して，大きな歴史的役割を果たしたことは，今日では歴史学や社会科学の常識であると言ってよく，それに敢えて異論をとなえて挑戦しようとする学者はみあたりません。ところで，近代化に関するこの種の議論に先鞭をつけたのは，周知のように，ドイツの宗教社会学者であったマックス・ヴェーバーやキリスト教の神学者であったエルンスト・トレルチでしたが，彼らの宗教改革に関する議論の詳細〔ディテール〕については，その後，新たな史料が発見されたこともあって，様々な異論・反論・オブジェクションが提起されてきており，最近では，〈ヴェーバー神話の解体〉などと言ったいささか過激と思われるような言説を耳にするまで

になりました。しかしながら，ヴェーバーの宗教改革に関する知見は，今日においても依然として様々な示唆を与え続けており，ヴェーバーをまったく過去の人にしてしまうことはできません。特に，筆者の専門分野である労働経済学におきましては，(1)プロフェショナリズムの研究，(2)キャリアとパーソナリティの研究，などのこれまで未開拓であった研究テーマに関して，ヴェーバー宗教社会学によって提起された問題や方法から，重大な示唆を得ることができることがわかってきたのです。ともあれ前口上はこのくらいにして，直ちにヴェーバーのルター研究を見ていくことに致しましょう。

ある時，多分1904年頃のことではないかと思われますが，マックス・ヴェーバーは，近代資本主義社会が，西ヨーロッパ諸国の中でプロテスタント人口が比較的多い国々（または地域）――イギリス，オランダ，ドイツ，北アメリカ，など――において形成され・発展したことに注目し，ひょっとしたら〈プロテスタンティズム〉（＝宗教）と〈近代資本主義〉（＝経済）が因果関係にあるがために，プロテスタント人口の多い国々において近代資本主義がまず早期に発展したのではなかろうか，といった鬼面人を驚かすような風変わりな仮説を思いついたのでした。この斬新な着想は，これを徐々にふくらましていくと，結句，世界史の理論ともいえるような実に壮大な社会科学の体系が構築できることになるかもしれない，とヴェーバーには思われたようです。かくしてヴェーバーは，宗教社会学の体系を作り上げることにしばし熱中致します。ヴェーバーは，マルクス主義に対して強烈な対抗意識をもっていましたので，宗教社会学を体系的に整えることによって，マルクスとエンゲルスの唯物論的で単線発展論的な歴史把握に替わる，エートス重視の精神論的で類型学的な人類史の理論を新たに作り上げることができるのではなかろうか，と考えたに違いありません。それは，以下の二点を考えれば明らであるように思われます。

第一に，もしもこの着想が学問的に実証できたならば，その暁には，マルクスの史的唯物論を論破し粉砕することができることになるからです。社会の土台である経済的下部構造の変化が，上部構造としての宗教・思想などのイデオロギーの変化をもたらすという唯物史観の有名な命題は，ヴェーバー宗教社会学の“エートス（倫理的心情）が経済を規定する”という逆の命題〔＝エートス論〕によって，論破されてしまうことになります。プロテスタンティズムの倫理が近代資本主義の産みの親であったことを学問的に実証することができるならば，ヴェーバーは，マルクスの史的唯物論に代わる新しい歴史の理論の構築に成功したことになります。

第二に，仏教，ヒンズー教，儒教，イスラム教など，世界諸宗教の“経済倫理”（エートス）の構造が解明され，経済の発展パターン（＝発展類型）と諸宗教の経済倫理との因果関係が明らかになるならば，経済の発展類型である経済発展のトラジェクトリー〔trajectory〕の全貌を，宗教社会学的に説明することが可能になります。そうなると宗教社会学は，歴史社会学の役割をも兼ね備えて，壮大なる〈世界史の理論〉の構築を遂に成し遂げてしまったことになり，ファウスト博士の“この世を統べる者”（＝神）の窮極の意図を知りたいという途方もない願望を満たしてしまうことになるわけです。フランシス・フクヤマの用語を使わせてもらうとすれば，社会科学はこれをもって終焉する，と言うわけです。

およそ以上のような構想の下に，マックス・ヴェーバーはまず1905年に，論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』〔以下では『プロ倫』と略す〕を発表し，その後，『儒教と道教』，『ヒンズー教と仏教』，『古代ユダヤ教』などの大論文を続々と発表して，宗教社会学体系の構築に努力したのです。よくもまあ一人で，かくも広範囲にわたる宗教史の広大な領域を，耕し続けたものです。これらの諸論文は，ヴェーバーが亡くなった翌年の1921年に，『宗教社会学論集』（全三巻）にまとめられて出版

されました。『宗教社会学論集』（全三巻）のうち，筆者が精読したのは『プロ倫』一冊だけであり，『プロ倫』に出てくるたった一つの註を理解するのに一ヶ月を要したこともございました。全三巻を読み終わるのはいったい何時のことになるのやらと考えると，ため息が出るのを抑えることができません。

ヴェーバーの『プロ倫』の目的は，〈プロテスタンティズムの倫理〉が〈資本主義の精神〉を生み出す酵母となったことを実証することに置かれていました。この〈プロテスタンティズムの倫理→資本主義の精神→近代資本主義の発展〉という命題を，ここでは，ヴェーバー・テーゼと呼ぶことに致しましょう。ヴェーバー・テーゼは，その後経済史家たちの手によって，近代資本主義の形成者（＝担い手）である産業資本家の宗教的系譜の研究として盛んに研究され議論され，様々な研究成果が生み出されもしました。しかしこれら経済史家たちの研究を，ここで取り上げるわけにはいきませんし，その必要もございません。本節の関心は，プロテスタンティズムの職業倫理とりわけルターのベルーフ論に向けられているのですが，“資本主義の精神”の方は研究対象にしていないからです。ですから，ここで検討しようとしているテーマは，『プロ倫』全体のテーマである〈資本主義社会の形成に及ぼした宗教改革の影響〉にはなく，あくまでも『プロ倫』のほんの一部を占めているにすぎない“ルターのベルーフ観念”に限定されているのです。それも，ヴェーバーによって始めて問題として提起されたところの，ルターによる聖書のドイツ語訳が果たした歴史的役割について，ちょっと考え直してみたいと思っているに過ぎません。これからいよいよ，『プロ倫』第一章の第三節“ルターのベルーフ観念”の検討に入るわけですが，その前にヴェーバーの宗教社会学について，一言だけ是非とも触れておきたいことがあります。

本節を書くために，ヴェーバーの宗教社会学に関する書物を色々と読み

あさっている中で，思い知ったことがありました。それは，ヴェーバーのキリスト教史に関する知識の該博さ深さのことです。込み入ったキリスト教思想史の脈絡を，三星レストランのシェフのように上手に調理していくヴェーバーの腕前（＝該博な知識と分析力）には，本当に驚かされました。特にヴェーバーの聖書に関する知識は，聖書学者顔負けの深さに達しているといってよいでしょう。聖書学者になるためには，少なくとも，ヘブル語，ギリシャ語，ラテン語という三つの古代言語を，完全にマスターしていなければなりません。ヴェーバーは，この三つの古代言語をすべて習得していますので，聖書に関して聖書学者とほぼ同じレベルでアカデミックな議論ができたものと推察されます。筆者が師と仰ぐルター研究の権威である金子晴勇先生は，ある時ヴェーバーの聖書に関する知識について筆者に次のようなことを語っておられました。

「ルターとメランヒトンは協力して，旧約聖書をドイツ語に訳しましたが，萩原さんも御存知のように，ルターたちは，普通の〈仕事〉というヘブル語の言葉をドイツ語に訳す時に，〈Geschäft〉（＝仕事）とか〈Arbeit〉（＝労働）というドイツ語を充てずに，当時〈聖職〉または〈天職〉の意味でしか使われていなかった〈Beruf〉というドイツ語を充てた，とヴェーバーは『プロ倫』で指摘していますね」，……「その典拠としてヴェーバーは，アポクリファ〔旧約続編〕の『シラ書〔集会の書〕』11章の20節と21節を挙げているのですわ。よくもまあ，そんなに細かいところまで注意して研究し，しかも覚えているわけですから，いやーほんまにヴェーバーの博識には驚かされますわー」と。

筆者は，聖書を手元に置いて，時間があれば毎日でも読むことを習慣にしてきましたが，ルター訳のドイツ語聖書は持っていませんでしたし，読んだこともありませんでした。本節を書くために，大塚久雄訳の『プロ倫』とドイツ語原書の『プロ倫』を久し振りに再読してみましたが，再読

した際に，ドイツ精神史に対してルター訳ドイツ語聖書が果たした役割の重要性に関するヴェーバーの指摘を知って，深く反省させられ，さっそくルター訳聖書を購入することにしました。ドイツ聖書協会発行の〈ルター訳『聖書』(アポクリファ付)〉を入手し，『シラ書』の十一章を読んでみました。ルター訳聖書は，ヴェーバーが指摘している通り，ヘブル語の「勤め」〔מְלָאכָה〕という言葉に，「聖職」〔または「天職」〕(Beruf) というドイツ語の訳語を充てていたことを確認することができました。

筆者の手元に，ヘブル語の『トーラ』と『旧約聖書』，ならびに七十人訳のギリシャ語旧約聖書があるにはあるのですが，浅学非才の故に筆者は，ヘブル語も古代ギリシャ語も読むことができません。従って，『シラ書』十一章からの引用は，本来は『タルムード』からヘブル語で引用すべきなのですが，ヘブル語が読めませんので日本語訳聖書から行なわざるをえません。『シラ書』十一章の19～21節を以下に引用しておきます。

『シラ書』十一章19～21節

(日本語訳旧約続編)

〔19〕「これで安心だ。自分の財産で食っていけるぞ」と言っても，
それがいつまで続くのか知るよしもなく，
財産を他人に残して，死んでいく。

〔20〕 契約をしっかり守り，それに心を向け，
自分の〈務め〉を果たしながら年老いていけ。

〔21〕 罪びとが仕事に成功するのを見て，驚きねたむな。
主を信じて，お前の〈労働〉を続けよ。

貧しい人を，たちどころに金持ちにすることは，
主にとって，いともたやすいことなのだ。

次は，『シラ書』十一章19～21節のルターによるドイツ語訳を見ておきましょう。ヴェーバーの推測によると，『シラ書』のヘブル語原本は当時失われていたために，『シラ書』に関してルターは，『タルムード』または七十人訳のギリシャ語『旧約聖書』（続編付き）からドイツ語に訳したものと考えられています。

『シラ書』十一章19～21節

（ルターによるドイツ語訳）

〔19〕 und sagt: Nun will ich mir ein gutes
Leben machen, essen und trinken von
dem, was ich habe —, doch er weiss nicht,
dass sein Stuendlein so nahe ist und dass er
alles anderen lassen und sterben muss.—

〔20〕 Bleibe bei dem, was dir anvertraut ist,
und uebe dich darin, und halt aus in dei—
nem ‹Beruf›, und lass dich nicht davon be—
irren, wie die Gottlosen zu Geld kommen,

〔21〕 sondern vertraue du Gott und bleibe
in deinem ‹Beruf›.

‹Beruf› と言うドイツ語は，ルターが聖書をドイツ語に訳す際に，自

分勝手に意味を変えて訳語として使用したために，大変数奇な運命を辿ることになりました。ルターが聖書のドイツ語訳に取り組んだ16世紀の前半においては，まだ中世ドイツ語が支配的な時代ですから，〈Beruf〉と言う言葉は，神父や修道僧たちが就いている宗教的なお“勤め”――すなわち召命あるいは聖職――の意味でのみ使われていたに過ぎませんでした。ところが今日，あるいは17世紀以降の近代ドイツ語においては，〈Beruf〉なる語は，召命あるいは聖職の意味で使われることはなく，もっぱら世俗的な意味における職業とか仕事の意味で使われているだけです。語彙の意味が歴史的に変化するのは，そう珍しい事ではありませんが，この〈Beruf〉と言う言葉の場合にかぎって大変興味深いのは，意味変化の陰の仕掛け人としてルターが関係していた点なのです。

ルターは，宗教的な含意のない普通の世俗的な〈仕事〉〔＝職業〕と言う意味のヘブル語やギリシャ語の語彙を，ドイツ語に訳す時に，〈仕事〉と言う意味は持たないが宗教的な〈召命〉〔＝聖職〕と言う意味を持つドイツ語の〈Beruf〉を充ててしまいました。これは本当にヒドイ誤訳だと言わざるをえません。外国語の試験で学生が，もしもこのような誤訳をしでかしたとしたら，間違いなく試験官は，その解答に零点をつけることでしょう。例えば，英語のテストにおいて，〈labor pool〉〔雑役工の溜り〕を〈神父さまの集会場〉と訳した答案があったとしますと，試験官は一体何点を与えるのでしょうか。零点にきまっています。ルターは，重大な誤訳をしてしまいました。しかし，ルターほどの大学者が，なぜこんな初歩的なミスを犯してしまったのでしょうか。勿論ルターといえども人間ですから，絶対にミスをしないなどということはありえません。しかし，それにしてもヒドイ誤訳だといわざるをえません。

ヴェーバーは，ルターの誤訳を単なる不注意によるミスとは考えませんでした。不注意によるミスではなく，ルターが〈意図的に〉誤訳したので

はないか，とヴェーバーは解釈したのです。それでは，ルターをよいしょし過ぎになるのではないか，とも思われますが，そうではありません。ルターの思想を解きほぐしていくと，ルターが〈仕事〉に〈召命〉または〈聖職〉〔Beruf〕というドイツ語を充てたくなってしまった気持が，非常によく理解できるのです。要するにルターは，ルター自身の神学思想または社会思想を表現したいがために，意図的に誤訳を試みたのだ，とヴェーバーは誤訳の意味と動機を解釈したのです。そして，ほかならぬこの誤訳のなかに，宗教改革の核心が秘められていることを，ヴーバーは繰り返し繰り返し強調してやみませんでした。

ヴェーバーは，ルターが〈Beruf〉という言葉に，〈世俗的な職業〉という意味と〈宗教的な職業〉〔あるいは召命〕という意味を，共に含ませることによって，ある思いを表現しようとしたにちがいない，と理解しました。それまでキリスト教の世界においては，神から与えられた“使命”〔Aufgabe〕を担う人は，神父か修道士であり，そうであるが故に，神父や修道士の仕事を聖職〔Beruf〕としてきたのです。それに対してルターは，平信徒が日常行なっている〈世俗の仕事〉こそが，神から与えられた“使命”なのであり，従って平信徒の〈世俗の仕事〉こそが“聖なる職”〔Beruf〕なのだ，と言おうとしていたのです。このような，ルターによって提起された新しい“ベルーフ”概念の中に，宗教改革の謎を解く鍵があるのだ，とヴェーバーは主張しているのです。ヴェーバーの言い分を聞いてみましょう。

> “それはともかくとして，次の一事はさしあたって無条件に新しいものであった。すなわち，世俗的職業の内部における義務の遂行を，およそ道徳的実践のもちうる最高の内容として重要視したことがそれだ。これこそが，その必然の結果として，世俗的日常労働に宗教的意義を認める思想を生み，そうした意味での天職〈Beruf〉という概念

を最初に作り出したのだった。つまり，この“天職”という概念の中にはプロテスタントのあらゆる教派の中心的教義が表出されているのであって，それはほかならぬ，カトリックのようにキリスト教の道徳誡を〈命令〉(praecepta) と〈勧告〉(consilia) とに分けることを否認し，また，修道士的禁欲を世俗内的道徳よりも高く考えたりするのではなく，神によろこばれる生活を営むための手段はっただ一つ，各人の生活上の地位から生じる世俗内的義務の遂行であって，これこそが神から与えられた“召命”〈Beruf〉にほかならぬ，と考えるというものだった”（大塚訳『プロ倫』，109～110頁）。（下線は筆者）

長すぎる引用ほど退屈なものはないので，この辺で止めておくことに致しましょう。この引用文の中に，ヴェーバーのルター神学に対する解釈と評価のポイント（要点）が，凝縮して表現されているといってよいでしょう。まとめましょう。

キリスト者にとって，職業は，神が与えてくださった使命なのである。

（ルター神学の核心，プロテスタンティズムの中心的教義）

ルターの“ベルーフ”論に込められた思想の新しさは，どのあたりにあったのでしょうか。『新約聖書』にはもともと，信者に対して，勤勉に生活することを求める記述が非常に多くみられ，信者でない者が一読すると，厳し過ぎてついていけない感じさえいたします。例えば，パウロの有名な「コリントの信徒への手紙」(1)によると，酒好きで食道楽の人間は，キリスト教徒失格だというのです。何故かというと，現世での快楽を追求するような輩は，神を信じていないがために〈死者の復活〉を信じることができず，従って来世も信じる事ができないために，快楽に走るのだ，というのです。

「もし，死者が復活しないとしたら，
“食ったり飲んだりしようじゃないか。
どうせ明日は死ぬ身じゃないか”
ということになるでしょう。」(『コリ』(1), 15—32)

コリントは，貿易港を有する大商業都市でしたから，コリント人には富裕な商人が多く，生活は大変華美であったと言われています。そのコリント人に向かって，酒を飲みご馳走を食べるのを止めなさいとか，酒の付き合いをするなというのです。キリスト者は，〔酒色は言うまでもなく〕酒食に決して溺れず，ひたすら勤勉に働け，とパウロは言っておるわけですが，このような〈世俗内的禁欲〉主義にもとづく〈勤勉主義〉と，ルターのベルーフ論が示唆する〈勤勉主義〉との間に，何か差異があるのでしょうか。

筆者は，ルターの神学は，ベルーフ論において，パウロ神学の限界を超えたのではないかと考えています。周知のようにパウロの主張は，イエスがキリストとして人を罪（＝死）から救い出してくれた後においては，キリスト者は，〈イエスはキリストである〉ことを堅く信じて動揺せず，ひたすら宗教共同体のために尽しなさい〔＝愛の実践〕，ということにつきると言ってよいでしょう。パウロによると，信者が世俗の仕事に精を出さねばならない最大の理由は，自分で額に汗して働かないと，他人（＝宗教共同体）の世話に頼らざるをえなくなってしまい，教会のお荷物になってしまうが故にそうした事態を避けるために働けということなのです。ルターのベルーフ論によると，キリスト者が世俗において何をおいてもなさねばならないことがもしあるとすれば，それは，神から与えられた使命である世俗の職業を，誠実に且つ良心的に遂行することである，というのです。パウロの神学とルターの神学とでは，キリスト者が現世を生きる姿勢

の面で，大きく違ってしまうのです。すなわちルターにとっては，職業倫理こそが重要なのでありまして，酒色や酒食は適当にすればよいことであって，信仰には本質的に関係のない事柄なのです。ルターにとって，世俗内的禁欲も世俗外的禁欲も信仰とはまったく関係のないことにほかなりませんでした。ルターは，ガッチリした体格の大食漢であったし，結婚してたくさんの子供をもうけました。

キリスト者にとって最も大切なこと，それは信仰である。*Sola fide.*

第三項　ルター神学と労働研究

ルターの神学とりわけルターのベルーフ論は，労働研究に様々な示唆を与えてくれているように思われます。神学と労働研究は，一見したところまったく関係がないかのようにみられるでしょうが，そうではありません。両者は，実は深い所で分かち難い関係を持っているのです。

1980年代の後半に，日本経済は未曾有の繁栄を経験しました。後にバブル経済と呼ばれるようになりましたが，株価と地価の暴騰を背景にして，個人も法人も，資産効果に促されて，贅沢な生活に明け暮れるようになってしまいました。築地の鮨屋が，金箔で巻いたにぎり鮨を売りに出したり，トヨタ自工のセルシオや日産のシーマのような高価な高級車がジャンジャン売れてしまうほど，人々はカネにまかせて贅沢をしまくるようになってしまいました。〈世俗内的禁欲〉思想〔＝理想主義〕の灯火は完全に消えてなくなり，代って〈世俗内的享楽〉思想が世を覆ってしまいました。吉原のソープランドは，“はかり知られぬ全盛”〔樋口一葉『たけくらべ』〕を満喫し，久方ぶりにいにしえの不夜城を再現することができました。そして日本の社会から，職業倫理とか使命感といった価値が，完全に消えてしまったのです。

その直ぐ後に，これまでにない醜聞の頻発と頽廃の瀰漫が，日本列島を覆い尽してしまったのです。作家の司馬遼太郎さんは，農業をやめて先祖伝来の農地を切り売りする不動産屋に転身してしまった農民のあわれな姿を見つつ，涙しながら死んでいきました。これまで，官僚としての高いプライドから，めったに醜聞事件を引き起こさなかった大蔵省のキャリア組が，ここに書くのも憚られるような事件を頻発させてしまいました。〔＝〇〇しゃぶしゃぶ事件〕。大阪では，漫才師が，府民の圧倒的な支持を得て府知事選で当選し，まもなく女子大生に破廉恥行為をしでかして辞任いたしました。堅実な職業の代表のように思われてきた，警察官，検事，裁判官などの職業領域においてすら，醜聞と贈収賄事件が起こってしまいました。学問の府である大学においても，女性便所のピーピングや抱きつき事件などが日常茶飯事になってしまったのです。

バブル経済の繁栄を経て，日本人は使命感・理想・自尊心を喪失した

日本人を，バブル経済の荒廃から立ち直らせることができるのでしょうか。筆者は，ひとたび醜い化け物のようになってしまった日本人を，もとの実直で恥を知っていた日本人に戻すことは，大変難しいことであろうと思っています。しかし，何とかしなければなりません。我々は，子供たちを悪臭漂う塵塚に残したままで，この世からおさらばすることはできないのです。それでは，一体何をしたらよいと言うのでしょうか。

もしも働く人々が，各々の職業分野で，各職業のパラダイムを深く心に留めて，職業的生涯をまっとうすることができるとするならば，日本人は美しさを取り戻し，日本社会をも悪臭を放つ塵塚から薔薇の花咲く園に変える事ができるかもしれません。職業倫理の確立こそが，今日本社会が解

決しなければならない焦眉の最大の課題なのではないでしょうか。ルター流の宗教改革こそが，今の日本には必要なのではないでしょうか。

筆者は，以上のような問題意識に立脚して，これから職業倫理の研究をやっていきたいと考えています。その第一作が，本研究にほかなりませんが，引き続いて，熟練工のクラフト・ユニオンと，医師・法律家・技術者などの専門職団体（professional association）を実証的・理論的に研究しつつ，プロフェショナリズムの理論の構築に取り組みたいと思っています。

日本人のすべてが，イチロウ選手のようなプロフェッショナリズムの精神を持して，人生を生きるようになれば，日本は必ずよみがえるであろう。

日本人は，イチロウ選手に続け！

（2002年５月30日）

Labor Writer Tomohiro Koseki and the Machi-kohba's World (Part 2)

Susumu HAGIWARA

《Abstract》

Tomohiro Koseki is a well-known labor writer who has been working as a skilled machinist for over forty years in Tokyo. He has published many books in which the life and work of factory workers in small factories at Kamata and Ohmori are described very vividly and in depth. These publications can be regarded as an excellent collection of labor history documents in the post-war Japan.

The article attempts to describe the career patterns of skilled factory workers in Tokyo by utilizing the Koseki's writings. A small factory in town is called "machi-kohba"in Japanese. The article focuses upon tow specific points that are career-patterns of machi-kohba workers and their skill formation processes. This article covers the third section of the first chapter.